

あさひ森の健康診断

調査団体名	あさひ森の健康診断	団体代表者名	藤谷常壽
設立年	2015年	対応してくれた人の名前	鈴木辰吉
団体URL	-		
活動拠点	豊田市旭地区	調査員	高橋伸夫、田中五月
取材日	2015年11月12日	レポート作成者	田中五月

活動内容

豊田市旭地区で地域住民主体の森の健康診断を行う。矢作川森の健康診断をステップアップしたものとして取り組み、三つの特徴がある。

1、子ども達を含む地域住民主体の取り組み。2、調査密度が濃く、精度が高い。3、人工林だけでなく、天然林の調査も実施する。

調査は2015年より3年継続して実施し、80地点の人工林、9地点の天然林の調査を実施する。

キャッチフレーズ

森から始める持続可能な地域づくり

会のモットー(何を大切にしているか)

最終的な目標は地域コミュニティを残し、未来に引き継いでいくこと。それを考える切り口として農業や旭では面積的に非常に大きい森などがある。

森の健康診断でも「何とかしていきんだ！」というメッセージをこめて活動していく。

設立から現在に至るまで変化したこと

「やれる」という自信がついた。

実は第1回目の参加者募集では非常に苦労した。本番三週間前にも申し込みが都市の方を中心に30余名という状況で、一瞬「無理かな？」と覚えることもあった。しかし、その後の奮闘で約100人の参加があり、終了後には地元の方から「周りにも広げていく」という良い感触の感想を聞くことが出来た。

連携している団体・専門家・自治体など

矢作川森の健康診断実行委員会、豊田市、森林組合、旭木の駅プロジェクト、あさひ薪づくり研究会。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

活動は森の健康診断だが、それを子どもを中心とした地域住民で実施していく。

今年も子どもが参加できるようにと夏休みの後半に日程を設定したが、後から後から行事が重なり子どもは一人の参加にとどまった。しかし、来年は更に綿密に調査を行い、なんとか子どもを巻き込んでいきたい。

現在直面している課題

想像以上に森の健康診断の意義が地域に理解されていないので、この理解を広めていかなければならない。また、中心人物が皆とても忙しい。一人何役もこなしている状況のため、会議にもなかなか全員が参加することが出来ない。

今後やってみたいこと

森の健康診断の結果を、実際の森づくりに活かしたい。100年後、森をどうすべきかというランドデザインを行いたい。このために天然林の調査も行う。今は伐採した木を搬出出来ないような所まで人工林になってしまっている。これを針広混合林にしていく。一度人工林となってしまった森を戻すことが並大抵のことでないことは有識者の意見でもわかっているが、森林をどうしていくかは、旭にとって地域づくりをどうしていくかと同じ意味を持つ重要課題。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

森づくりに関する専門知識が必要。

しかし、森づくりに関しては、矢作川森の健康診断メンバーが協力してくれるはずで、これ以上ないというくらいのメンバーのため、専門知識についてはあまり心配はしていない。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

なぜ天然林の調査まで活動を広げているのですか？

<答え>

現状、木材を出せないところまで人工林を広げてしまっている。「ここは天然林のままがいい」という場所がある。森の未来ランドデザインを実行する上で、針広混交林を作るための調査材料となる。

その他、伝えたいこと

森の健康診断を行う背景のお話がとても印象的でした(田中)。
以下は鈴木さんの談です。

--

元々の想いは地域のコミュニティを何とかしたいということ。
私達の世代が子どもの頃には美しい田んぼや畑、手入れのされた山林があった。
のどかさや豊かさが感じられる美しい里山の風景があった。

しかし、高度経済成長期、みな豊田市の工場にマイクロバスで通うことが当たり前の生活となった。
豊田市に近いという立地、時代背景などがあったのだが、今見渡すとかつてあった田んぼや畑、美しい山林は荒れてしまっている。

このような状況の中で、今このあたりはムードが二極化している。

- ・どうにもならんぞ、なるようにしかならんだらうと日々を暮らす
- ・何とかしようと動き始める

後者、何とかしようと動き始めると切り口として、農業や森、農村文化といったことを選んでいく。
旭では土地利用の81%が森林である。多くの面積をもつ森に関心がありながらも、打つ手を模索していた時に矢作川森の健康診断から声がかかって取り組むことになった。

森の健康診断も最終的な目標は、地域を何とかする、という目標に向かっている。

森を切り口にして、皆の意識をあげていき起爆剤としたい。
森の未来ランドデザインは非常に難しいはずだが、やることで大きな活路になる。

--

写真



←取材風景



↓当日説明風景



←集合写真



←子どもも調査



↑来年はもっと子どもが増えるはず！